きみのぬくもり

とび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
きみのぬくもり

【Ｎコード】
Ｎ８１８５Ｔ

【作者名】
とび

【あらすじ】
まさかのコンビで勝手に。捨て猫拾い猫？　りえちゃんとななちゃん。

1

夢だとか、愛だとか、希望なんて、今の私には信じようのないものだった。絶望の果てに待つものなんて何もない、と思う。少なくとも、うすいブラウス一枚で雨の夜道を独り歩いている今は、何の希望も持てようとは思わない。自分で作った状況だった。冷たい雨は容赦なく身体を突き刺して、ぴゅうぴゅう吹く風も濡れた服をひどく冷やした。服が肌に張り付く。みじめで、寒くて、哀しくて、悲しくて、寂しかった。なんでこうなったんだろうと思うと、涙がぽろりぽろりこぼれた。どうせ既に顔は雨で濡れているんだから、気になんてしない。

大学へ通うために親元を離れて東京へ出てきたまではよかった。こちらで就職していた兄の家に下宿することになって、3年間は二人で楽しく暮らしていたのに。ある日突然、兄は「結婚するんだ」と言った。今まで二人っきりで暮らしていた家には、新しく兄の奥さんが住まうことになった。私だってもう二十歳を過ぎた身だからわがままなんて言いはしない。だけれども新婚夫婦の暮らす家に独りでひっそりと同居するのはそう気持ちのいいことではなかった。兄の奥さんへの違和感と、兄への後ろめたさと申し訳なささが同時にぶつかり合う。もう高校生やなんかではないのに、悩んだはずみに追い出されてもいないのに家を飛び出してきてしまった。秋の夜は、考えていたよりもずっと寒いものだった。

ぽろぽろと泣きながら考え事をしていると、ふと目の前に公園があるのが見えた。中央のベンチの上には屋根がある。雨宿りができそうだ。慌てて駆け寄った。ぐったりと座り込むと、ほっと心が安堵した気がした。家に、戻りたい。だけれど「大人」としてのプライドと、「妹」としてのプライドが鬩ぎあって私に逃げることを許

してくれない。携帯の画面を覗くと、ＰＭ１１：３０と液晶には表示されていた。もう、どうしようもないのに。ふと思い出したフィッツジェラルドの短編のタイトルを脳裏にふわふわさせながら、そっと目を閉じた。眠ってはいけないと思いつつも、やっぱりそのままベンチにもたれ込んだ。

＊

「ねーねー」

ん？　あれ、友達なんかと、来てたっけ。と、いうか、ここどこだったっけ。やけに冷える肩を抱きしめながら、ふっと閉じていた目を開いてみた。すると流れ込むように記憶は蘇る。そうだ。逃げてきたんだ。明るく輝いていると思った空は暗く澱んでいた。眠りに落ちてしまってから、どのくらいの時間が経ってしまったのだろう。今なお降り続く強い雨も何も先ほどと変わっていない。ただひとつ変化していたのは、隣に私の顔を覗き込むひとがいたことだった。

「え……？」
「だいじょーぶ？」
「あの、誰……ですか」

ああ、ごめん、ときょとんとした顔をしていた女性は納得したよ

うに頷いた。ふわりと香水の香りがする。視線を送ってみると、パンツスーツを着て、ヒールの高いきちんとしたパンプスを履いていた。学生なんかではないらしい。私がそんなことに思いを馳せているのはよそに、女性はいそいそと自己紹介を始めた。

「あなたのこと、拾いにきた。自分、お兄ちゃんいてるやろ、その人に頼まれた。んと、で。あれ？　名前、なに？」

「え？　あ、あの」

「名前、名前」

「りえ、です」

途端にぱっと彼女の表情は輝いた。ぐっと握手でもするように私の両手をぎゅっと握る。

「あたし、ななっていうん。うちにおいで」

勢いよく叫んだ彼女の目は、まるで宝石であるかのようにきらきらと光っていた。暗い夜空の下、よくわからないけどなぜか私の前に現れた彼女はまるで天使か女神のように見えた。兄が遣わしたとかなんとか言っているが気にはしない。なぜそれほどまでに私が勢いに呑まれているかというと、寒くて寒くて寒くて死にそうだったからである。

1（後書き）

設定東京なので言葉は流してください。設定としてはりえちゃん→標準語、ななちゃん→標準語に矯正されつつある関西弁てことで。

2

出してもらった温かいココアを飲んでいると、いくらか心は落ち着いた。彼女の前には私のとは違う香りを漂わせるコーヒーが置かれていて、ココア飲まないんですか？と聞いてみると、甘いもの苦手だから、と彼女は微笑んだ。

「あんな、ごめん。さっきの説明はさすがにテキトーすぎた」

急に背筋をぴんと伸ばした彼女にきょとんとした視線を送ると、彼女は困ったようにまたまた微笑んだ。よくふにゃりと笑う。

「短刀直入に言うんやけどさ」

また適当じゃん、と思う。でもまだ彼女の顔は輝いていて、何がそんなに嬉しいんだろうかと単純に疑問を感じた。猫でも拾った気分なのだろうか。それなら彼女はさっさと私を元の場所に戻したほうがいい。

「りえちゃんのお兄ちゃん、てさっき言ったけど。実はなーあの人あたしの従兄。まあつまり簡単に言うとりえちゃんもあたしの従妹なわけ」

「は？　あの」

「ほんっとになんか急すぎる説明なんやけど、りえちゃんとあたしと兄ちゃんは一応親戚なん。とはいっても血は繋がってへんけど。ま、その辺の説明は省かしてもらうわ、別に大事やあらへんねんそこらへんはな」

やけに早口になる彼女に戸惑って視線を送ると、今度は彼女は気

がついていないようだった。混乱する頭で少しずつ紐解くように考えてみると、どうやら簡単にいうと私と彼女は親戚同士らしい。どうりで顔が似ていると思った。失礼かもしれないけれど、ふにゃりと笑うところは私にそっくりだと思う。よく人に言われるのだ、りえちゃんはふにゃっと笑う子ね、と。

「んで、親戚っても遠いからかわいいかわいいりえちゃんも遠ーくから見守ってたわけやけど、とうとうＳＯＳが出て出動してきた！　うちの家系で東京に住んでんの、兄ちゃんとりえちゃんの他はあたしだけやし」

「そう、なんですか。ごめんなさい、こんな夜中に」

「そんなそんな。あたしずーっとりえちゃんに会いたい会いたいってちっちゃい頃から思ってた。それにしても我ながらよく見つけたわ、小学生で最後に会った時以来ほんま綺麗になって」

それって自分のこと褒めてるのと一緒ですよ、だってあなた私にそっくりなんだもん。愚かな考えは自分の奥底でつぶして、とりあえず深々と頭を下げた。暖房の効いたあたたかい家はとてもありがたい。あれから家に戻るなんて気まずくてとても無理だと思っていたので助かった。絶えずニコニコと柔らかい笑顔を見せてくれる彼女は、ゆっくりしていきな、と優しく語りかけた。

「ありがとうございます、えと」

「あ、うん、ななでいいよ」

「じゃあ、ななさんで。ありがとうございます、ほんっとに」

「うんうん、気にせんと」

まるで振り子のようにしきりに頷いてから、ななさんはふと言った。瞬時に私は自分の中で何かが混乱しすぎて爆発するのが聞こえた。

「しばらくここで生活するんやしな。あ、せや、もう夜遅いしとりあえず寝よ。荷物とか明日でええよね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8185t/

きみのぬくもり

2011年10月8日19時29分発行